



硯田 一弘

COVID-19 禍のパラグアイ事情

概観

世界中を震撼させている新型コロナウイルス感染症（COVID-19）禍であるが、Cuarentena = 検疫隔離が始まった3月11日の時点では、「Cuarentena とは大きな物言い、何で？」というのが筆者を含め大方の人たちの印象であった。

パラグアイでは免疫学で有名な米国 Emory 大学医学部出身の医師 Julio Mazzoleni 大臣が率いる健康社会福祉省（Ministerio de Salud Pública y Bienestar Social）が新型コロナ対策を引き受けており、毎日テレビや新聞に登場して日々の感染対策の様子を報じて、国民に感染予防の大切さを訴え続けてきた。

また、外出時にマスクを着用することを義務付け、違反者には罰金を科すほか、店舗や事務所など不特定の間出入りする建物の入り口には手洗い設備と検温器、ハンドサニタイザー（手のひらを消毒するスプレー）を設置することとし、査察庁が随時厳しくチェックする等、他の国では見られない完璧な防疫体制を確立、これが6月までは効果を発しており、パラグアイでの感染者数は周辺諸国と比較すると圧倒的な少な

さであり、単に予防の徹底だけでなく、BCG 接種の徹底などの永年行われてきた衛生処置が奏功したものとも言われてきた。

検疫隔離の開始当初は、南米の人がマスクを付けたたり手を洗ったりする筈がない、と思っていた。特にパラグアイを含む南米南部（ブラジル南部、パラグアイ、ウルグアイ、アルゼンチン）では冷たいマテ茶テレレを回し飲みする習慣があり、普段から感染症に対する感度は高くない。そのパラグアイで、マスクと手洗いの習慣があつという間に広がったのは驚きであった。2009年に豚インフルが流行した時にはベネズエラに住んでおり、テレビニュースで日本中がマスクをしている様子を見

て驚いたが、南米パラグアイでも外出中の人達が全員マスクを付けている様子を見て、この国のメンタリティは極めてアジア的というか、もしかすると日本以上に日本的と感じた次第。



ショッピングセンターの入り口には、ビデオカメラと温度センサーが一体化したモニターが設置されている



店の入り口には必ず手洗い（写真は特記ないものはすべて筆者撮影）



別のショッピングセンターでもカメラ一体型検温センサーで検温、パソコンで記録



エスカレーターは、距離を空けるために緑色の部分に乗るよう指示



トイレは故障ではなく、間隔を空けられるよう一つ置きに封鎖



閑散としたショッピングセンター。物販と飲食・観光業が受けているダメージは極めて大きい。

しかしながら、結果的には Cuarentena の語源となった 40 日の隔離期間を過ぎても隔離政策は続けられ、半年以上が経過している。

周辺国の中では、ブラジルでの爆発的感染増が世界的に報じられただけでなく、人口当たりの死者数では依然としてペルーが世界一



道路の真ん中のサインボードにも、ハンドサニタイザー（手の消毒液提供機）が設置されている



閉鎖空間を避けるために屋外のフードコートが人気。ここにも手洗い所

となっており、世界的にも酷い状況の中南米、という定義がなされているものの、隔離政策が始まった3月から4月にかけての緊張感も現在は薄まり、週末や給料日となる月中や月末には交通量も以前と変わらない程回復している印象。

現状

6 月末まではラテンアメリカにおける新型コロナ感染阻止の優等生と言われたパラグアイであるが、7 月から感染が急増、8 月以

	感染者数	死者（人）
3月	69	3
4月	197	7
5月	720	1
6月	1,235	6
7月	3,117	32
8月	12,324	276
9月*	21,022	478

（*9月は28日まで）
性別では女性17,982人=46%、
男性20,702人=54%

出所：<https://www.lanacion.com.py/>（元データは保健省）

降は爆発的に増える状況となり、9月28日現在の感染者は38,684人（9月単月で21,022人）、死者は803人（同478人）と、感染の勢いが止まらない日々が続いている。

景気への影響

コロナ禍が始まる直前までは、アスンシオン市内には次々と新規のホテルや高級レストラン・ショッピングセンターが建設され、コンベンション需要の取り込み等も目指して10年前のペルーの首都リマのような様相を呈して活気づいていた。

しかし、世界中が同じ状況にある訳であるが、コロナ禍によって最も被害を受けているのは飲食と観光・物販セクターであり、アスンシオン市内の高級料理店の多くは倒産の憂き目に遭い、ホテルの建設は中断、ショッピングセンターも閑古鳥が鳴く状態で、集客の目玉の一つである映画館は今日に至るまで半年間閉まったままとになっている。

行動制限が緩和された7月以降も外食の需要は戻っておらず、倒産を免れたレストランでも厳しい状況に変化はない。一方、デリバリーは引き続き活況を呈しており、コロナ禍で最も変わった景色の一つが、大きな四角い布バッグを背負って街中を走るデリバリーのオートバイ。パラグアイではタクシーに代わる交通手段としてウーバーが定着しているが、何かウーバーイーツには認可が下りていない模様で、アルゼンチン発祥の Pedidos Ya（ペディードス・ジャ）と Monchis（モンチス）という2社がこの成長市場を独占している。



目立って増えたデリバリーサービス（“abc”紙 Web サイトより）

また、市内で目立つのはコンビニの台頭。5年ほど前から市内のあちこちに24時間営業のコンビニが出来始めていたが、コロナ禍において存在感を増した感のあるコンビニは出店攻勢を強めている。パラグアイでは至る所に薬局 = farmacia があるが、薬事法で薬局での食品の販売が禁じられているため、外出制限が続いた期間に成長した数少ない業種と言える一方、強盗被害の報道も目にするようになってきている。

最も人気のスポーツであるサッカーも無観客での試合が行われているが、パブリックビューイングの機会も失われているのでテレビのスポーツ放送も盛り上がり欠けている。

近年雨後の筈の如く建設されてきた高層住宅の建設の多くは再開されているが、こうした建築ラッシュを支えてきた近隣諸国の富裕層の動きも鈍化しており、不動産市況は大いに低迷しており、市内にはこれまでも増して貸家・売家の看板が目立つようになっている。

日雇い仕事で糊口を凌いできた非公式セクターの労働者は、収入の道が閉ざされて困窮しているものの、政府の金銭支援や民間の炊き出しなどの援助を受けて日々を送っている。

世界中がコロナ禍で昨年対比 GDP の大幅マイナスとなっているが、パラグアイの GDP 落ち込みは南米の中では最も少ない。政府の中小企業支援策も継続されており、IPS 社会保険に加盟している会社では、社会保険庁から給料の半分が支給される仕組みが機能している。

治安

景気の悪化と同時に治安が悪化する懸念もあるが、現在のところ大幅に治安が悪化しているとの実感はない。ただ、店舗への強盗や路上でのひったくりの類の報道は以前より少し増えたようにも感じられる。また前述の通り、コンビニやガソリンスタンド併設の店舗などでの強盗に関する報道は時折見かける。しかし、ブラジルのような殺人をとまなう強烈な強盗は発生していない。

路上生活者の数が他の南米大都市に比べて極端に少ないアスンシオン、不景気は拡大しているものの、依然としてホームレスの姿は殆ど認められていない。

物流

新型コロナの流行が始まった当初の3月から4月にかけては、感染者の殆どが外国からの帰国者或いは入国者であり、特に早くから感染拡大が目立った隣国ブラジルからの帰国者が持ち帰る例が大部分のケースを占め、結果としてアスンシオン周辺とブラジル国境周辺が最も感染率の高いエリアとなり、その傾向は今日まで続いている。

ブラジルとは生活必需品の相互流通が盛んな関係から、国境が封鎖された後も、商品運搬用のト

ラックに限っては通行の自由が確保されている。しかし、徹底した衛生検査を同時に行うために、通関には普段を遥かに上回る時間を要し、運送業者が国境付近で足止めされ、その間に感染してウィルスを持ち込むことになっているとの指摘もある。

パンデミック以外の要因として降雨不足が発生しており、河川交通の要であるパラグアイ川の水位が20年来の大幅な低さを記録し続けており、鉄鉱石や石灰石、大豆などのバルク物資の物流も滞り、またコンテナも喫水を下げないよう積み荷の量を制限していることから、サーチャージの引き上げが起り、納期の遅れと物流コストの上昇をもたらしている。

交通への影響

4月から停止状態にあった国際航空便は、外国人救済用の特別便を除いては運航されていない。感染拡大が止まらない現状で鎖国がいつまで続くか目途も立っていないが、臨時便は常時満席に近い搭乗率との情報もあり、早期の航空ダイヤ復旧が望まれている。

国内の移動に関しては、アスンシオン首都圏と第二の都市であるエステ市周辺で最も多くの感染例が報告されているために、制限の完全解除の見通しも立っていないが、然るべき理由があれば陸路の往来は比較的自由に行われている。

（すずりだ かずひろ 株式会社アディルザス
代表取締役。アスンシオン在）